特集

松原高校総合学科の今

――二期生のアンケートで見えてきたもの――

易　寿　也

はじめに

松原高校が総合学科に改編して早くも五年目の春がスタートした。創設以来の解放教育の蓄積を新しい時代にむけて大きくはばたかそうという私たちの取り組みは、一つの公立高校がいかにその教育内容を多様で豊かなものに改革できるのかという一大チャレンジでもあった。新学習指導要領にもとずく総合学習の導入は今教育現場を大きく揺り動かしている。しかし、その論議が学習の形態にむけられていることが多いことに不安を抱いている。私にとっての総合学習とは、一人の人間が生きるということに焦点をあてて、その生きることのふしぶしで直面するであろうさまざまな問題について多面的、継続的、体験的にまさに総合的に学習することであると考えている。その意味では、学校自体が、生徒たち一人ひとりが〝育ち〟〝生きる〟ということを大切に考えていないところでは、なにものも生まれないのは自明のことである。しかしこの五年間の歩みを振り返ると、学校の内外を問わず、この改革のスタートとすべきあたりまえのことを巡る抜き差しならないせめぎあいの連続であったように思う。とはいえ、総合学科の二期生は、数多くの「ありがとう」の言葉と感動と涙を残して、自分達の三年間の高校生活に誇りをもって旅立っていった。新しい学年も、マザーアースエデュケーションとの共同ですでに五年間積み上げてきた二泊三日の伊賀上野野外活動センタ

ーでのＨＲ合宿で多くの不安を乗り越え、新しい生活への期待に胸を踊らせて登校してきている。彼らの元気に力づけられながら、この五年間を生徒の具体的な声を中心として振り返りたい。

何が問題なのか

いま私たちがめざしているのは、成熟した市民社会を心豊かに生きる担い手を育てることであり、分権化された地域社会の担い手を育てることである。いま社会の深層で崩れはじめているのは〝人としてのあり方〟である。一方での日常化するホームレスへの襲撃、犯罪化するいじめなどの少年による凶悪犯罪、ストーカー殺人、自らの命を絶っていく子どもたちの現実と、他方での相次ぐキャリア官僚による非常識な行状や、無責任な警察、病院、自浄能力を失った腐敗したおとな社会の現実は、コインの裏表である。共通しているのは、ともに〝人が生きるという営み〟が大切にされていないことである。

子ども達は、自らの存在の危うさに不安を感じ、携帯電話のつながりで互いのつながりを感じようとし、コミュニケーション能力の欠如は、ストレスを内向化させ、男女の距離の取り方が分からない若者達はストーカーへと進む予備軍となる。しかし、このような事態に直面してさえ、「基礎学力の低下」がヒステリックに叫ばれ、「権利権利といって子どもの言い分を認めるから……」「躾ができてない」などの説教が〝したり顔〟でだされる。従来のすでに時代的役割を終えた〝ものさし〟で現状の教育の危機を計ることにどれほどの意味があるのか。

「フリーター一三五万人」「進路を決められない子どもたち」といわれる中で、従来の教育システムはあまりにも無力である、社会的な情報や刺激から遮断された学校空間は多くの生徒にとってはモラトリアム（おとなになることへの執行猶予期間）をモラトリアム＝何も体験せず考えなくてもよい期間として押しつける役割しか果たしていない。人生で一番考えることが求められる時に、わかるのかわからないのか、従うのか従わないのかといった二者択一的な思考の中に隔離されるのである。四月二日の朝日新聞に掲載されていた千葉商科大学の加藤寛学長の「最近、『学生の学力が低下した』という声をよく聞くが、学生は未来からの留学生だと考えている。未来という観点から見ると、学生と先生との間に差はない。先生は過去の蓄積で学生より物を知っているが、過去からの難民にすぎない。むしろ、コンピューターなどは学生の方が進んでいることがたくさんある。『学力が低下し

た』というのはナンセンスで、そんなことは問題じゃない。未来に住む学生のために、我々がどういう援助ができるかを考えるのが大切だ」という言葉は、刺激的かつ本質的である。問題の核心は、「主人公は生徒であり、教師は支援者にすぎない」ということである。この〝当たり前〟は学校文化の中では決して〝あたり前〟ではない。伝えるべき知識は最小限にして、世代を越えて、ともに生き、考えるということこそ教育の中心になるべきである。

総合学科はモラトリアム時代を楽しむ学科であるといえる。そのための学習の構成要素として考えられるのは、教師と生徒、生徒同士において双方向的であること、答えは体験のなかにあるということ、試行錯誤が許されるということ、生涯の生き方につながる学習だということである。学習システムの運用にあたっては、自分達のものさしを押しつけない姿勢、生徒の現実を直視した多様で具体的な教育の試みが必要であろう。そんな体験を共有しあう中でしか〝絵に画いた餅〟ではない新しい〝ものさし〟の具体的な提案はできないであろう。

松原高校での教育の営みはそのような刺激を提供するのに充分な意味がある実践である。

総合学科の生徒たちは今

さわやかな風をのこして

「私は松原高校で生きる勇気と、自信をつかむ事ができました。私が中国残留婦人の孫として日本にきたのは小学校三年生の時です。当時、文化や言葉のまったく異なる日本に来て、戸惑っている私を受け入れてくれる小学校はありませんでした。一年が過ぎ、やっと学校へ行けるようになり、喜んでいた私を待っていたのは違いを認めない社会であり、さまざまないじめでした。何かあるごとに私に浴びせられる言葉、私が意味もわからず、初めて覚えた日本語は「ばか」という言葉でした。中国から日本にきた多くの人が経験したように、さまざまな差別にあい、孤独感を味わい、毎日毎日が嫌でたまらず、自分が中国人であることに自信が持てませんでした。

しかし松高で私は少しずつ自分を取り戻すことができました。自分の思いを伝えることで、ともに悩み、考え、歩んでくれる友達がたくさんできました。中国人や日本人という枠組みを越えて、「共にいきる」ことを肌で感じることができた三年間でした。これは準高生の取り組み

をはじめとする、松高の先輩達の思いが受け継がれているからだと思います。中国と日本の両方を知っている私にしかできないことがあると思い、松高だけではなく、いろいろな場所で自分をアピールし、思いを伝えて来ました。そのたびに理解してくれる人が増え、自分が強くなったと思います。そんな私でも、「人権の集い」で自分の今までの体験を伝えようと思った時は、不安で一杯でした。でも一年生のときから一緒に活動してきた人が部落差別に反対し、自分の誇りと自信を取り戻すためにゼッケンをつけて登校すると言った時、私も差別に反対する意味でゼッケンをつけようと決心しました。体育館でアピールする時、緊張していましたが、でもみんなの真剣な目に驚きました。みんなが聞いていてくれると分かって、力が湧きました。みんなに話を聞いてくれて「ありがとう!!」と私は言いたいです。松高のみんなは私を一人の人間として接してくれました。松高に来てよかったし、みんなに逢えてよかった。「自分は生きているんだ!」と実感できた三年間です。私はみんなから力を一杯もらいました。強くもなれました。これから日本で自分に自信をもって生きていくことができます」

「もっと専門的に福祉の勉強をしたい!これが私が松高を選んだ理由だった。私が福祉の道を志すようになったのは、知的障害をもつ弟の存在が、自分にとってすごく大きかったからだ。そのことははじめて言えた「クラス開き」から、私はどんどん自分に自信がもてるようになった。それをいう事ができたクラスの雰囲気って最高で、「松高に来て正解!」って心から思った。この三年間で福祉系の授業を数多く選択し、習う全てのことが新鮮で毎日嬉しくてしょうがなかった。また特別養護老人ホームや老人保健施設、障害者の授産施設や作業所、心療内科など、ほんとに数多くの施設を訪問し、経済的理由での人手不足の問題や施設に入りたくても入れない待機者の多さ、そして世間や家族の理解がとても大切だということ、そんなことを肌で感じることもできた。松高で学んだことは福祉のことばかりじゃなかった。好奇心旺盛な私は知らないことをそのままほっておけなかったので、部落問題研究部に入ったりピースワークショップや人権の集いにも参加したりした。そこで学んだものは「ともに生きる」ということだった。「ともに生きる」とは、つまりお互いを理解し合うということ。障害者問題や、部落問題など全てのことに通じるすごく大切な言葉だ。相手のことを知ることは、新しい自分との出会いでもある。私は新しい自分を発見させてくれたみんなに心から感謝したい。私の三年間はこの学年のキーワードでもあ

るfaith(信頼)に暖かく包まれたすばらしい時間だった。この時間で得た「信頼」は消えることはないので、寂しくはありません。私はまたこれから新しい自分を探す旅に出ます。松高で得た自信と勇気をもって幸せな人生を送ります。そして次に会う時は、今よりも、もっともっと素敵な自分になっています」

この文章は、生徒の手作りでこの上なく温かい雰囲気のなかで行われた総合学科第二期生の卒業式の卒業生の言葉から引用したものである。この言葉のなかで、松原高校が大切にしてきた部落問題を中心とした人権教育と総合学科が提供できる教育内容が止揚された形で登場していることにうれしくなる。われわれがめざしていた基本方向が間違いではなかったと感じる。

(総合学科卒業生(二期生)アンケートより)

1　入学時に総合学科の内容を理解できていましたか。

ア、できていた11%　イ、大体できていた34%

ウ、あまりできていなかった41%　エ、できていなかった16%

2　総合学科で学んで良かったですか。

ア、良かった57%　イ、大体良かった30%

ウ、あまり良くなかった10%　エ、良くなかった3%

3　開講されている選択科目の数についてどう思いますか。

ア、満足できた23%　イ、大体満足できた45%

ウ、あまり満足できなかった25%　エ、不満だった8%

4　選択科目の内容は全体的に見て期待通りでしたか。

ア、期待通りだった9%　イ、大体期待通りだった47%

ウ、あまり期待通りでなかった32%　エ、期待通りでなかった12%

5　科目選択についての資料は十分ありましたか。

ア、あった12%　イ、大体あった27%

ウ、あまりなかった44%　エ、なかった18%

6　科目選択の決定についてのガイダンス(説明や相談)は十分でしたか。

ア、満足できた12%　イ、大体満足できた36%

ウ、あまり満足できなかった38%　エ、不満だった14%

7　科目選択については選びたい科目を選べましたか。

ア、選択できた17%　イ、大体選択できた43%

ウ、あまり選択できなかった24%　エ、選択できなかった16%

8　選択した科目で自分の進路につながるものがありましたか。
ア、あった39％　イ、大体あった23％
ウ、あまりなかった24％　エ、なかった13％

9　特に学んで良かったと思える選択科目があれば書いて下さい。

10　「産業社会と人間」では、進路（ライフプランの確立）や将来の社会参加につながる体験や参考になることがありましたか。
ア、あった18％　イ、ややあった44％
ウ、あまりなかった23％　エ、なかった15％

11　「産業社会と人間」では、研究や発表など創意工夫できる機会を豊富に持つことができましたか。
ア、できた16％　イ、大体できた41％
ウ、あまりできなかった30％　エ、できなかった13％

12　学校生活や学校行事においても、総合学科らしさを感じたことがありましたか。
ア、あった48％　イ、ややあった31％
ウ、あまりなかった14％　エ、なかった7％

13　総合学科の様々な取り組みで、自分で考える力や自主性を伸ばす事ができましたか。
ア、できた35％　イ、大体できた39％
ウ、あまりできなかった19％　エ、できなかった7％

14　総合学科の様々な取り組みで、自己表現（話す力など）や他者理解（聴きとる力など）などのコミュニケーションの能力が身につきましたか。
ア、ついた33％　イ、大体ついた40％
ウ、あまりつかなかった19％　エ、つかなかった8％

15　学校の施設や設備については満足できましたか。
ア、できた18％　イ、大体できた42％
ウ、ややできなかった25％　エ、できなかった15％

16　あなたの進路は次の内のどれですか。（希望も含む）
ア、就職39％　イ、四年制大学14％
ウ、短期大学7％　エ、専門学校28％　オ、その他12％

17　総合学科の三年間の体験を通して、新たに身につけたもの・気づいたこと・あなた自身が変わったところ、その他、今後の総合学科の充実・発展のための提言などあれば、書いて下さい。（自由表記）

【よかった点は】

総合学科だからこそ学べたことがかなりあった・自分の

中の自分を発見することができて、それを出すことができた・自分自身を見つけることができた・（松高は）自分を発見できるところ・新しい自分を知れた・みんな一人一人の個性が伸びたと思う・（自分の）個性を見つけた・個性ができた・自分らしさが出せたと思う・総合学科で勉強していくうちに自分らしさというものがどういうものかわかってきたような気がする。少しだけ……。

・ちょっと強くなれた……!?・いろんな意味でおとなになれた・おとなになりました・何かと成長した・前より自分に自信が持てた・いろいろな人たちがいることを知り、その人たちに対しての理解もできるようになった・人の立場にたって物事を考えられるようになった・人に対して考える力が少しついた・人権のことが少しわかった・それぞれの立場を持った人々が自分のことを話したりそれを受け止めてくれる人がいて、そのことを素直に出せる学校の雰囲気がよかった・人間として熱く、大きくなった・仲間意識（みんなと仲よくしようとする思い）が他（の学校）よりも強い・全学年仲がいい・人間は頑張れば力以上（の力が）出せる・自分自身が大きくなれた・ゆったりと過ごせた・充実していた・前向きになった・（これから）前向きに考えようと思った・総合学科は生徒が中心になって何でも動くところやから、何かリードしていく力が身についた・自主性が身についた・明るくなった・社交的になり、性格も明るくなった・（最初は）消極的だったけれどだんだんそれもなくなってきた。（最終的に）すごくよかった・人との付き合い方がいい風に変わった・自分の引っ込み思案な性格がなくなった。（何でも）進んで取り組めるようになった・人とのコミュニケーションがとれるようになった。自分の性格が変わりだした・人と話す力がついたと思う・はじめて会った人とでも普通に話ができるようになった・人前でちゃんと話をする力がついた・社交的になり、性格も明るくなった・人見知りがちょっとましになって、初対面の人ともけっこう話せるようになった・人前で話ができるようになった・人前に出る訓練ができた・自分の意見を人に言えるようになった（複数）

・課題研究の発表時間・課題研究がよかった・課題研究は（これからも）続けるべきだ・課題研究などで人前での発表力がついた・課題研究（あるいはその他の授業）などで責任をもつことを大きく重視できるようになったと思う・前に出て話すことが多かったので、そういう面で成長できた（多数の意見）・いろんなことが体験でき、吸収できた・普通科では体験できないこと（実習など）ができ、知識として自分に残った・変わった授業が体験

できた・将来の道が確実に決まっている人には総合学科はいいと思う・将来の生き方についていろいろ考えられるようになった・自分の進路について考えることができてよかった・自分のやりたいことのきっかけを与えてくれたこと・総合学科で迷いながらも就職が決まり、学校生活も楽しく過ごせたのでよかった・自分の進路について考えることができてよかった・自分の進路に合った選択科目が選べたのでよかった・自分がしたいこと、思ったことを言ったりできるようになった。これからも（その力を）生かしたい・選択授業は楽しかった・選択授業がよかった・選択授業ではクラス以外の子とも仲よくなれたし、外国語の授業では留学生が多い。・行事とかでは先生も一生懸命やし、体育祭や文化祭も総合学科ならではの良さや盛り上がりがあるからいつまでもそれを残していってほしいと思います・勉強と行事のバランスがよかった・自分が驚くほど活動的になることができた。・中学校時代と違って自分の意見が聞かれそれについて話し合われたから、自分が松高生の一員(学校を作っている)という実感がもてた・いろんなことに目を向けたりチャレンジしたりする精神をもつことができ自分らしさが出てきたと思う・松原イズ総合学科です！

【三年間で分かったこと】

・自分の力だけでは何もできない(周囲の協力も必要)・肩の力を入れすぎてもダメ・行事は気合を入れてやろう！・それぞれ選択した授業が違うから自分で責任をもつこと、自分で考えること（を学んだ）・夢をもつこと、与えること、感じること・考える力、自由の意味について（考え）伸ばしていけることを学んだ・自分で動く、ということを学んだ・自分の責任ですべてが動くということ・最後までやり通すこと・自分で決めること・人の大切さ・いろんな考え方をもった人がいてお互いを尊重し合うこと。積極的にいろんな人とコミュニケーションを取る方がいい・「英語のセリフ」で映画を見る楽しさを教えてもらった・人とのふれあいが自分を育てることを発見した。

【大変だったところは】

・三年の三学期は課題研究でせかせかしたから、もうちょっとゆっくりと（課題研究のことを）したかった・一年の時からレポートばっかりいっぱい書いてしんどかった・道を切り拓いていくということの難しさを知りました・人間関係の難しさ

【学校への要望】

・科目選択の時、希望者が多いからといって抽選はやめてほしい・選択を希望した授業は受けたい・もっと自由

に選択科目を選びたかった・もっと選択を自由にしたい・選択授業を（ガイダンス冊子の）文章だけで選ぶのではなくて実際に（授業を）体験して選びたい（もっとわかりやすくしてほしい）・科目選択の時、ビデオや写真なんかで授業の内容を知らせた方がいいと思います・進学する人は選べる科目が限られてしまうからそこをもっと考えてほしい・進学の子にも好きな科目を取らせてあげてほしいです・一年次に、三年までの選択授業を（全部）決めるのは無理！・体験学習を増やしてほしい・三年も地理を開講すべきだ・外国語は書けるより話せる方が大事だと思います・もっと自分の興味のある授業を取れるようにしたらいいと思う・もっといろんな講座を開講してほしい・実習をもっと増やす・学校の老朽化を止めた方がいい・クーラーが要る。せめて進路が控えている三年生にだけでも着けてあげて！・新しいコンピュータをもっと早く導入してほしかった！・もっとこうしろとか余分な事を言わずに生徒にやらしてみたらどうでしょう。企画ももっと生徒にまかしていいと思う。先生は見守っていろ！

【不満だったところは】

・理系では、二、三年生の選択授業で一つしか自分の関心のある授業が選択できない。・講座の枠が限られているので関心のないものを選択する可能性もあり、（そこにも）不満を感じた・選択授業の内容が説明と違いすぎた・課題研究はよくなかった。

卒業生へのアンケートの結果では、入学時に総合学科の内容を理解していたかという設問にたいしては、できていたと大体できていたが合わせて四五％であるのに対して、できていない全くできていないが五五％であり、不安いっぱいで入学してきたようである。しかし、三年間を経て、科目選択の方法や、授業内容の説明などには評価が厳しいが、総合学科で学んで良かったかという設問に対しては、良かった、大体良かったが合計八七％という数字が出ている。その理由を探ってみると、選択授業の内容についてはまだまだ不満もあるようだが、学校生活や学校行事で総合学科的なものを感じたという生徒が七九％であり、自分で考える力や自主性を伸ばすことができたが七四％であり、自己表現力や他者理解などのコミュニケーション能力ができたと答えたものが七三％である。生徒は総合学科という環境のなかで確実に自己の変革を実感しているようである。

自由表記の部分では、「自分の意見がいえるようになった」「いろんなことに目をむけることができてチャレンジ精神がもてた」「自分の〝らしさ〟というものがどういう

ものか分かってきた気がする」など、自分の成長を実感している感想が多い。これらの結果は、今の教育に、何かを一方的に伝えるのではなく、生徒のなかに何かが育つことを支援するといった方向へのパラダイムの転換の必要性をせまっているのではないかと考えられる。

五年間の歩みを支えてきたもの

選択するということについて

アンケートの中でも出てきているように、カリキュラムの選択を中心にして学校生活の中で選択する機会が多いということは、みずからの選択責任を具体的に感じるという意味で重要であった。生徒の選択する能力は年々向上しており、その分学校側への要望も具体的なものになってきた。実習体験の中で、「私は一対一の介護の方が相手に自分の気持ちが伝わっていいと思うから介護福祉士よりホームヘルパーを選びたい」といった具体的な話が自然に出てくるようになるのも普通科時代とは大きく変わってきている。逆に、入学時には福祉関係だと考えていた生徒が、実際に体験するとイメージと違っていたということで違う方向へ進路を変更したり、自分の選択を悔やむ場合もある。これらも含めて選択することの意味である。決定することが目的ではなく選択するプロセスこそが大切だ。こんな風に生きてみたいという意欲がそれぞれの心の中に生まれたら、遅すぎるということは決してないのだから。このことは、就職の際、「松高の生徒達はいくら落とされても次を自分で探して挑戦しているのが印象的」と職安の担当者から評価されたが、選択するという体験はそんなところにも生きているのかもしれない。

コラボレーション（共同作業）の力

この五年間のうちに、松原高校を舞台にしてさまざまな共同作業が実現した。松原高校の教育内容が多様で刺激的であり得たのも多くの学校外の方々との共同作業の結果であるといえる。三年間のスタートである新入生のＨＲ合宿は、マザーアースエデュケーション（ＭＥＥ）の協力の下に企画している。マザーアースエデュケーションとは、アメリカインディアンのスー族の中で長い間生活してきた松木正さんを中心に、松木さんの体験をもとに、日本での環境教育の企画を提案している民間団体である。総合学科に入学する生徒達に何か新しいメッセ

ージを贈りたいと思いながら、なかなか具体的なプランをもち合わせない私たちにMEEからの提案は大きな力となった。「信頼のないところではなにも生まれない」という言葉のもとに、各クラス一名の若いスタッフと担任が、生徒とともに伊賀上野の山中を舞台としたアクティビティーに挑戦していく。一つ一つのアクティビティーを楽しむ中で生徒達は人とつながることの大切さ、自分が受け入れられているという安心感を共有していく。不安でいっぱいだった中学生の顔が、新しいものを受け入れてみようという柔らかな顔に変わっていく。

MEEとのつながりは節目節目で意見を交流しあう三年を通じたものになっている。「産業社会と人間」という、一人ひとりの、企画する力、行動する力、表現する力を育てることを目的とした総合学科のコンセプト授業においても、注目すべき取り組みがはじまっている。単に社会見学、企業見学ではなく、生徒達に、自分たちも社会に提案できるし、力になれるんだということを実感させることができたらと今年よりはじめた「コンペティション二〇〇〇」と名付けたイベントは、過去三年間の授業の実績をふまえて、学校外の方々からも提案をうけて共同企画された。発表当日には、多くの学校外の方々を招き、生徒達からの「〝子どもの遊び〟をクリエイト」「ユニバーサルデザインにチャレンジ」「LET'S TEACH HIV」などをテーマにした具体的な提案を審査していただき今後に継承すべき多くの成果を得た。工業高校との学校間連携、保、幼、小学校、各種施設での実習は、もとより、学校が自ら門戸を開くことによっていかに多くのエネルギーを校内に呼び込むことができるのかということを実感している。

多様性の受け入れ、それぞれのカミングアウト

総合学科になるにあたって一番心配されたのがクラス作りの伝統の継承という面であった。これは、「みんな同じクラスでいっしょに生活することによって……」という発想に基づく不安であった。私たちは、学校を多様性の共生する場として育て上げたいと考えた。知的障害をもつ交流生である準高生に中国、ベトナム、ブラジルからの渡日生、ハングル、フランス語、中国語、スペイン語、手話の授業、多くの国からの長期留学生の受け入れ、ベトナムのボーミンドク高校との生徒自治会レベルでの姉妹校提携とPTAをあげての支援活動、一九九八年度のフィリピンのPETA（フィリピン教育演劇協会）への参加を中心としたスタディーツアー、一九九九年度の

マザーテレサの施設などでのボランティア活動を中心としたスタディーツアーの実施。いろんな立場の友人。いろいろな大きさ、組み合わせでの授業。参加体験型の授業、これらの一つ一つが、いろんな人がいていいんだ、あなたはそれでいいんだというメッセージになっている。生徒達はいろんな所に自分の居場所を見つけ、互いに互いの多様性を認め合い、共に生きる体験を積み上げることが、それぞれのカミングアウト（自分を語る）ということにつながっている。

創設以来被差別部落出身の生徒を中心に続けられてきた、「クラス開き」をはじめとする自分を語るという営みは、多くのさまざまな課題をもつ生徒たちが自分のことを認め受け入れてもらえる場所、自分に自信をもってもいいんだと感じられる場所として、新しい息吹を吹き込んでいる。人と人とのつながりを大切にした取り組みは、クラス作りを新しいステージに確実に引き上げている。

課題

引き続き課題は山積している。まず、総合学科を卒業した生徒たちを、大学や企業をはじめとした社会がどのように受け止めてくれるのかという点である。これは大学や企業自体がこれからの社会作りをどのように考えているのかということと大きく関わってくる。われわれは、心豊かな地域社会作りについてメッセージを送り続けるしかない。現在の教育内容をいかに継承していくのかも大きな課題である。文部省や府教委がいう特色作りとはいかなるものか。特色作りとは、平準化を否定することに他ならない。それを支える人材作りは今後どのように保障されるのであろう。われわれは、今この松原高校の特色ある教育内容をできる限りしっかりと支えていくというしかない。授業内容についても、一人が何教科もの授業をになう中で、その蓄積は至難の業である。生徒の授業に対する要求はますます高まっている。新しいタイプの授業を育てるネットワークが必要である。今の教育の改革を大きく阻んでいる壁は従来の〝生徒観〟や〝学級観〟を変えることのできない教師自身にもあるということを明記しておく必要がある。

五年目の私たちの合い言葉は

「キープコンセプト、一つ一つの教育活動の質を高めよう」である。

総合学科は、地域社会を支えてくれる新しい世代の意味のある支援者になりたい。